

国際交流基金助成事業報告書

薬学部一年次生 板金優里枝

1. はじめに

2019年8月18日から8月25日の8日間、国際交流基金の助成を受けて、バンクーバーサマープログラムに参加しました。そして、バンクーバーのwaterfront駅の近くにあるOxfordInternational NORTH AMERICA EUROCENTERSという語学学校に5日間通い、カナダで、様々な体験をしたので、ここで報告させていただきます。

2. ホームステイ

私は、語学学校から電車とバスを乗り継いで約40分で通える場所で、ホームステイをさせていただきました。ホームステイ先の家族構成は、病院勤務のマザーと自営業のファザーと介護関係会社勤務の娘さんとその旦那と犬一匹で、私のほかに三人の日本人がホームステイをしていました。マザーは、朝早くから仕事でしたが昼ごはんには、サンドイッチとジュースを用意してくれて、人柄のいい人でした。夜ごはんは、ファザーが用意してくれました。日本では、味わえないような料理をいただけたことがいい経験になりました。そして、靴が壊れた時にマザーはとても心配してくれて、靴を貸してあげるよと言ってくれ、マザーの愛情を感じました。

3. 医療施設見学

語学学校を通い始めて一日目に病院と超音波検査施設を見学しました。カナダでは、病気になるとまず、かかりつけ医であるファミリードクターに診てもらってから、必要であれば専門医に診てもらうという制度があり、そのファミリードクターのいるファミリークリニックに見学に行かせていただきました。そのクリニックは、日本と違ってダークブラウンを基調とした内装で落ち着いた雰囲気を醸し出していました。そして、カナダでは医者は白衣を着用せず、ほくろを除去したり、血液検査をしたり、いろいろなことができることを現地の医療通訳の方から、教えていただきました。そして、見学した超音波検査施設は私立で、費用は高いけど検査の結果がわかるのが早いので、緊急のときなどは、利用されるのが多いということでした。

4. 現地のゲストスピーカー

三日目に、現地の日本人薬剤師からお話をきくことができました。その方は、日本で二年間薬剤師として勤務したあとカナダで三年、かけて資格を取った方でした。カナダで薬剤

師になるためには、薬を英語でもう一度勉強する必要があり、また、大変なのがOSCEで、カナダのOSCEは17ステーションもあり、現地でボランティアなどを通じて経験を積まないとカナダ人に対する対応の仕方が日本人とは異なるので、そういう経験がなければ、受かることはかなり難しいということでした。そして、筆記試験は英語ができれば日本で勉強した薬の名前、成分と薬の英名もほとんど似ているのですぐに覚えられるそうです。そして、五年以内に全ての過程を終わらせないといけなくて、試験を受けられるのは三回までと制限されているので、精神的にとってもつらいということでした。カナダでは、薬局の頂点は薬剤師で、薬剤師のやりたいようにできるし、残業もほとんどなく、日本に比べると仕事後の予定を組みやすいけど、何かを決断するときは大変で、働き始めはわからないことだらけだけど、新人でも先輩との年収はほとんど変わらないということもあり、仕事をこなした年数関係なく仕事をこなさなければいけなくて、アシスタントの仕事の出来が良くなければ涙が出るほど大変だそうです。しかし、仕事が大変でも誰も助けてくれない、最初の一年は患者さんから、いつもならこんなに払わないのにとわざと意地悪を言われたりして、最初は苦勞するけど次第に慣れてくるそうです。カナダの主な仕事は、監査、カウンセリング、服薬指導、医師からの薬についての問い合わせに対応することで、さらに予防注射を施すことができると聞き、とても驚きました。そして、処方箋がなくてもずっと飲んでいる薬があれば、薬剤師は薬をだせるということ、攻撃的で自己主張が強い人には処方拒否権を行使できるそうです。薬の値段は、高いけれど医療費は無料だそうです。薬剤師は、一店舗に一人で、お薬手帳がなくても国のシステムでHIV以外ならオンライン化されていて、別の店でも患者さんがどの薬を飲んでいるかをチェックできるそうです。しかし、その便利な反面、薬剤師が訴えられる材料源になるそうです。日本の薬剤師はまだまだ、医者への許可なしに動けない場面がたくさんあり、薬剤師が訴えられることも少ないけれど、カナダの薬剤師の権限は大きいものの責任も大きく、訴えられることは日常茶飯事だと聞き、かなり大変だと思いました。もし仮にカナダで薬剤師として働くには、カナダの人は、痛みに弱く、強い痛みを訴えた直後に普通にお菓子を食べていたり、カナダではsorryと言ったら、訴えられるから言うてはいけないことなどカナダの文化を考慮して適応し、働かなければならないのだと思いました。

5. Oxford International NORTH AMERICA

私が留学させていただいた語学学校は、日本人の割合がとても低く、フロントもとても国際的な雰囲気でした。そして、休憩中でも日本語を話していると、先生から英語で話さないと注意されました。前半の授業では、疑問文、助動詞など基本的な文法を学びました。そして、授業の後半になるにつれて、医療を意識した授業に入っていく、薬剤師と患者のやりとりを並べ替える、病気の症状を表す英単語を学んだり、薬物中毒のことについて警察、使用者、犠牲者などのそれぞれの立場からみた薬物について英語で話し合ったり、英語の文章を穴埋めしたり、先生が出したお題について英語で話しあったりしまし

た。そして、最後の授業では、二人一組で医者と患者さん役を英語で演じることをしました。担当の先生は、とても陽気な先生で、いつも私たちにこれでいいって聞くときにはオキドキと言って、話し合うペアを何度も変えてくれたので、仲良くなれた人が増えました。授業は、あっという間に過ぎていきました。

5. 20歳の誕生日

私は、奇しくもバンクーバーで20歳という人生の大切な節目を迎えました。私は、語学学校に通い始めて、授業以外の時間で英語を話す機会を自分で作れずにいたことに、とても悩んでいました。そんなときに、先生にメキシコ人の女の子を紹介してもらい、海外の友達ができました。あまり、自分のことをうまく話せなくて、友達を困らせてしまったけれど、友達は私のことを温かく受け入れてくれました。そして、英語ばかりが飛び交う空間にじかに居ることができました。日本の現地時間で誕生日を迎えたときに、みんなが楽しそうに英語を話す空間にいられたことを、とても幸せだと感じました。その次の日に、仲良くなった友達が私を誘ってくれたので、放課後にみんなでピザを食べに行きました。私以外に、もう一人の日本人の女の子がいて、その子は、四月から留学していたので、英語を流ちょうに話していて、私に対しても大半英語で会話をしてきました。私以外の子は、英語を上手に話せたのですが、私はあまり英語が話せなかったので会話についていくのは大変でしたが、英語を必死に理解しようとしたので英語の思考回路がとても鍛えられ、微妙な音量で話す日本語がすべて英語に聞こえるくらいになり、留学前よりも、英語を話せるようになったと実感しました。そして、海外の友達がみんなで唱和して私の誕生日を祝ってくれました。また、語学学校でも、ホームステイ先でも誕生日を祝ってもらえました。海外のお友達ができて、海外の友達と英語でたわいもないことを話して、笑いあったことが自分にとって、人生最高の誕生日プレゼントなのだと思えました。そして、20歳という誕生日を海外の友達に祝ってもらえたことが、なにかとても深い意味があるように感じました。留学して、自分の内向的すぎる性格はあまりよくないと思い、これから少しずつ、人と話す機会を自分から作っていく必要性を感じました。そして、英語ももっと上達して、友達にもっと信頼してもらえる自分に成長したいと決意を新たにすることができて、モチベーションが上がりました。帰国後には、友達にSNS上、英語で連絡を取り、また会うことをお互い、楽しみにしていることを確認しあいました。

6. 最後に

私は、バンクーバーでたくさんのことを学びました。海外旅行にほとんどなじみがなかったので、海外に行くまでにどんなことをしなければならないのか、乗り継ぎはどうするのかなど新たなことを学び、英語が飛び交う環境に身を置くことで、将来に対するモチベーションが上がりました。また、ホームステイ先で日本とは違う文化様式を体験し、日本とは異なる風景を楽しむことができました。海外の友達を通して、自分の長所と短所を改めてはっきり

させることができました。本当に貴重な体験をさせていただいたことに、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

